プラットホーム

京浜急行１０００形の思い出

柳瀬川ひろし

初めて高松築港駅のホームに立った私は、この電車を知っているとおもった。
ホームに入って来る電車を見たとき、なぜか甘酸っぱくて潮風の香りのする懐かしさが込み上げてきた。
電車を知っているというのは、見たことがある・乗ったことがあると同義語だ。どんなに色を変え、置かれた環境を変えたとしても、私にはわかる。私は、この表情をした先頭車輛が駅のホームにゆっくりと入って来るのを、３年間見続けたことがあるからだ。
この電車に乗って三浦海岸駅に来たのは、ロングボードで大会に参加していたサーファーだ。彼は、海岸近くにあるショップでスクールのインストラクターをしていた。
数人いたインストラクターの中でも、彼は一風変わった経歴の持ち主だった。
他のインストラクターは、子どもの頃から地元で波に乗っていたローカルたちだった。けれど、彼は海とは縁のない横浜市内で育ち、教師になってからサーフィンを始めた。週末ごと、三浦海岸に通って波に乗っているうちに、ショップのオーナーに声をかけられてインストラクターになったらしい。
彼の本業は教師。副業を持つことができないのでこの仕事はボランティアだと言っていた。自分のテクニックを確かめるためにも、人に教えることは有意義なんだとも教えてくれた。

私は信じなかった。きっと何らかの形で報酬を受け取っているとおもっていた。彼には何かそういう社会のルールに縛られない自由な発想をするところがあった。
「こんなに週末ごとサーフィンばかりしていて学校の授業は大丈夫なの」
　私が、冗談半分にそう尋ねると、彼はピアノを弾く真似をして笑いながら答えた。
「音楽と体育の専科担当さ。学級担任は冒険すぎて持たせられないって言われたよ」
今は、彼が実際に教師だったのかどうかもあやしいとおもっている。彼との会話を思い出せば出すほど、実態がなかったような気がしてくるのだ。
あの波待ちのときの浮遊感。テイクオフした後のボードの下に広がる広大な海を踏みしめた感覚。私が踏みしめたボードの下の海はあまりに深淵で掴みどころがなかった。それは、彼に共通する存在感ととても似ていた。
「来週は休むよ。娘の誕生日だから」
「えっ？お子さんいたのですか」
「二人いるよ」
　私はずるいとおもった。結婚していることすら言わなかったから。
　けれど、幼い女の子が二人いるということも、今となっては本当だったのかどうかあやしいものだとおもっている。

彼があまりにサーフィンに情熱を傾け真摯に取り組んでいたため、その他のことはどうでもよかった。私も彼と同じように、サーフィンの世界を通して世の中を見、生きることを考えていたから。

彼がいなくなってからは、彼が語ったサーフィン以外のことが、すべて嘘臭くおもえてきた。

しかし、彼の話の真偽を確かめることには興味が持てなかった。

生身の彼と波に乗ることはもう二度とないのだから。

あれは金曜の午後だった。

私が、市役所で面白くもない事務仕事に飽き飽きしてきたころ、誰かが点けた待合室のテレビが、サーファーが落雷に合ったというニュースを伝えた。いつもなら聞き流すのだが、冒頭の「三浦海岸」という地名が耳に留まった。

その後、ニュースは聞き覚えのある彼の名を告げた。私は、まだ理解できていなかった。彼は金曜日には学校があり、サーフィンをしているはずがない。

しかし、即死と伝えられた彼は、私の通っているスクールのインストラクターだった。年齢も私が知っていたのと同じだった。

私はすぐさま退席してショップに電話をかけた。

「あいつは結構沖に出ていて、のんびり一人で波待ちしてたようでね。雷警報が出たんですぐ放送したんよ。上がるようにって。他のサーファーはすぐターンしてパドリングを始めたんだけど。陽子ちゃん、あいつは止めずにもう一本待ってた。確かにいい波を生み出すうねりが、真っ黒な雲の下に盛り上がって見えたんだよ」
マスターは、そこでしばらく無言になった。
私は確信した。もうだめだと。

「あいつはいつものように背筋を伸ばして正座し、何かを祈っているようだった。両手を広げ天を仰いだ後、腰を引きノーズを上げてボードを回転させた。割れる前のうねりにうまく乗せてパドリングをやめテイクオフした瞬間だった。真っ黒い雲とあいつが一直線につながった。」
私はオーナーの声が誰の声なのかわからなくなり、電話を切った。
彼は、サーフィン中の落雷事故で３６歳の夏、還らぬ人となった。
その日から、私は駅で赤い電車を見るのが怖くてたまらなくなった。もちろん乗ることもできなくなっていた。
駅のホームでなくても、突然通りがかった赤い電車や走り去る赤い電車を見ると涙が溢れた。
事故からしばらくすると今度は、赤い電車を見るたびに、彼が乗っているのではないかという想いに囚われるようになった。

私は彼の事故を見た訳でもなく、彼の葬儀に参列してお別れをしたわけでもなかったのだから。
天罰だとおもった。妻子ある男を好きになってしまった私への。
不条理だともおもった。なんで何人もいたサーファーの中で彼に雷が落ちなくてはならないのか。
雷が激しくなったとき、彼の心に、もしかしたら雷に打たれるかもしれないという恐れがあったのだろうか。
事故を知ったときから、喪失感が私をがんじがらめにした。けれど、私が死ねばよかったとはおもえなかった。彼にはただただ生きていてほしかった。
彼は私たちの将来について何も語らなかったけれど、海の面白さや奥深さを、サーフィンを通して私に教えてくれた。私は彼の良き理解者であり、サーフィンを通してそれをともに体現できる忠実な生徒であろうとした。つまり、私が一方的に彼の恋人だとおもっていたのだ。
胸をわくわくさせながらこの赤い京急電車を三浦海岸駅で待っていた私は、もうどこにもいない。
私は、人生のほとんどを失くしてしまったような気分になり、それまでの暮らしとは全くかかわりのない四国にリクルートの道を探した。

それでも、何百キロと離れた地で初めてこの電車を見たとき、私の心はざわついた。
起こるはずもないことを期待した。
私が１Kのマンションを借りたのは裁判所の近くだ。
さっそく、最寄りの片原町駅に出かけてこの電車を待った。
「あなた、昔は赤かったでしょう？」
「あれは、本当はエンジっていうのかしら」
「彼を運んだことがあるでしょう？」
「あのサーフィンのとても上手な彼を」
「私のことは覚えてる？」
「週末になると、いつもホームの端っこであなたが目の前に停まるのを待っていた私のことを」
彼に会える喜びと、この電車のキュートな顔は、私の中でいつの間にか連想ゲームのピースの一つとなっていた。
私は、あなたの顔の中央上部にある、まあるい前照灯がかわいくて大好きだったの。
三浦海岸という、夏だ・水着だ・海水浴だというロケーションにぴったりの観光地に、エンジの色はあまり似合ってはいなかったけれど。
電車がやって来る気配がした。
白線を跨ぎ越して覗き見ると、あの特徴的な前照灯が目に飛び込んできた。緑と白で彩られたツートンカラーの電車は、ゆっくりと左右に揺れながら恥ずかしそうにホームに入って来た。

三浦海岸駅とは違って、牽引する車輛の数を減らした電車は、瀬戸内の海の香りを微かにボディーに滲み込ませて、私の前に停まった。
私は降りて来る乗客に目を凝らした。
彼はいつも最後に降りて来て私をやきもきさせた。彼にはそんな考えはなかったことを私は知っていた。ただ私が勝手にやきもきしたのだ。
他の乗降口には乗り降りする乗客が何人か見えた。けれど私の目の前には一人も降りて来ない。私は思わず笑ってしまった。
彼が降りて来るはずはなく、彼に似た誰かが降りて来るはずもなかった。
静かにドアが閉まり電車は動き出した。電車は、「さようなら」と言ったようでもあり、「またね」と言ったようでもあった。
この頃私は、輪郭のはっきりしなくなってきた彼の笑顔に向かって、もう大丈夫だよと言えるようになった。